様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月３０日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720111
研究課題名（和文）チノ語の記述調査及び周辺諸言語との言語接触・言語類型論的研究
研究課題名（英文） Linguistic Fieldwork on the Jino language and the Study of Language Contact and Linguistic Typology among the Neighboring Languages
研究代表者
林　範彦（HAYASHI　NORIHIKO）
公立大学法人　神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：４０４５３１４６

研究成果の概要（和文）：
中国雲南省に分布するチベット・ビルマ系言語であるチノ語には悠楽方言と補遠方言の2 つの方言がある。代表者はこれまで悠楽方言の基本文法の研究を進めてきたが、語彙データ・文法データの不明な点が多くあり、また補遠方言については調査がほとんどなされていない状況であった。
この状況に鑑み、チノ語悠楽方言の補充調査、ならびに補遠方言の現地調査をのべ4回行った。悠楽方言については、動詞連続構造、節連結の問題、格体系の詳細、およびコピュラ文の構造など文法の諸側面の解明に加え、チノ語悠楽方言の歴史的発展についての現段階の知見を整理することができた。また補遠方言についてはまだ初歩的であるが、語彙データを総計2300語程度、基礎文例550例を収集できたことから、音韻体系の分析と声調の発展について初期報告をすることができた。
加えて2008年度末にはタイ北部・ラオス北部の踏査を行い、現地チベット・ビルマ系、タイ・カダイ系、ミャオ・ヤオ系諸民族の状況を視察し、同時に資料収集を行った。2010年度にはチノ語の周辺に分布するハニ語ゲランホ方言、ラフ語モンハイ方言の調査を行うことができ、前者は基礎語彙を約1800語、後者は500語を収集できた。具体的な検討はこれからに委ねられるが、今後の地域言語学的問題の解明の基盤を作ることができたのは大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：
The Jino language is a Tibeto-Burman language and spoken in Jinghong city of Yunnan Province, China. It has two main dialects, namely Youle and Buyuan. The head of this research project (henceforth ‘head’) has been engaged in the basic grammar of the Youle dialect, but the detailed information of Youle Jino lexicon and grammar must have been studied more. Besides, the Buyuan dialect had not been studied in detail.
In the research background mentioned above, the head conducted linguistic fieldworks on Youle and Buyuan dialect for four times during this research period. As for Youle dialect, the head clarified various aspects of grammar (verb serialization, clause-chaining, case-marking, copular sentence, etc.), and investigated the historical development of this dialect. As for Buyuan dialect, the lexicon data collected in the field amount to about 2,300 items and the sentence to 550, so that the preliminary reports on the phonology and the tonal development were able to be made.
In the end of the academic year of 2008, the head traveled through the northern Thailand and Laos to grasp the basic linguistic and ethnological situation of Tibeto-Burman, Tai-Kadai, and Miao-Yao ethnic groups. In the academic year of 2010, the head conducted linguistic research on the Gelanghe dialect of Hani and the Menghai dialect of Lahu, which are geographically and genetically close to the Jino language. The head collected about 1,800 items of basic vocabulary in the former language and about 500 items of vocabulary in the latter language. Although the further investigation should be needed, the preliminary research on these languages can be considered as a basis for solving many areal linguistic problems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：チノ語、ロロ・ビルマ諸語、チベット・ビルマ諸語、東南アジア諸語、記述言語学、言語類型論、歴史言語学、言語接触

１．研究開始当初の背景

チノ語(基諾語、Jino)は南端をミャンマー（ビルマ)・ラオス・ベトナムと接する中国雲南省西雙版納州で話される少数言語である。系統的にはシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語群に属する。この言語を話すチノ族(基諾族)は人口約２万人を有する。チノ語は大きく悠楽方言と補遠方言に分かれるが、チノ語を自由に話せる話者人口は両方を合わせても多く見積もって 1万数千人程度であろうと考えられる。

チノ族は 1979 年中国政府に認定された民族であるため、学術研究は他の民族の研究に比して、非常に新しい。代表者以外では、チノ語の研究は蓋興之(中国雲南民族学院)の『基諾語簡誌』(1986 年、民族出版社)ほか数編の論文しか存在しなかった。また中国の研究はすべて従来の漢語文法の枠組みを無批判に適用しただけのものが多く、言語実態に即した記述がなされることはなかった。

その後の比較・対照研究からチノ語自体が同系のロロ・ビルマ語群の諸言語の中で共時的にも通時的にも興味深い特徴を持っているとされながらも、言語データの不足からおのずと比較研究において限界が生じていた。

代表者は先行研究の状態を鑑み、中国雲南省で本研究計画以前に 10 回以上の現地調査を行い、特に悠楽方言の文法を博士論文にまとめた。これにより基本構造について解明されたが、複合語の語構成や動詞連続構造、コピュラ文などの詳細な文法現象についてはなお不明な部分が多い。さらにこれらの現象を東南アジア一帯の言語事象から比較・検討されたこともない。また基礎語彙についても包括的なレキシコンが存在しない。補遠方言については基礎的情報さえも乏しい。

少数言語が大多数の漢語話者の圧力により消滅に瀕する危険性を孕む中で、少数言語の記述と、その特徴の言語類型論的・言語接触論的位置づけに関する分析は急務である。

２．研究の目的

１の研究開始当初の背景から、チノ語諸方言の語彙と文法を更に詳細に調べ、レキシコンのデータベースを構築することを目指す。そして、特に研究がこれまで十分でなかったチノ語補遠方言のデータを現地調査により収集し、その音韻論・形態論・統語論の情報を整理・分析することを目指す。また、チノ語が話される周辺に分布するチベット・ビルマ諸語、および他系統の東南アジア諸語との比較研究を通じて、語構成などの東南アジア地域特徴の解明を目指すことを目的としている。

３．研究の方法

研究の方法としては基本的にチノ語の現地調査によるデータ収集とその整理分析、および資料収集によって得た知見に基づき、チノ語および周辺諸言語の地域的特徴を再検討する手法が挙げられる。

第一のチノ語の現地調査は、雲南民族博物館等の協力を得て、チノ語悠楽方言の自然発話データおよび補充調査、補遠方言の語彙調査ならびに基礎文例調査を行う。悠楽方言のデータは以前採録した自然発話のデータを再度母語話者に聞いてもらい、発音しなおしてもらった後、文法分析を加えていく。同時に新出語彙などの情報を採録していく。補遠方言のデータはあらかじめ準備している補充語彙調査票・基礎文例調査票を用いて、日常語彙と基本文法の概要を明らかにしていく。収集された語彙は pdic などを用いて電子化し、検索可能なデータベースの構築を図る。

第二に、周辺諸言語のうち、チベット・ビルマ系のハニ語やラフ語については現地調査などの方法を用いて基礎データを収集するとともに、中国・タイ・ラオスなどで出版された言語学関連書籍・論文を集積し、複合語の語構成の対照や語彙比較、コピュラや動詞連続構造などの文法現象の対照を行う。また、タイ・カダイ系、モン・クメール系の言語のついては国内外で発行された他の研究者の専門論文および書籍などを参考にしながら、チノ語の方言に見られる文法現象の地域言語学的・言語類型論的な位置づけを検討する。

さらに中国領内、および近隣の地域に分布するチベット・ビルマ系、タイ・カダイ系諸語のデータを比較し、具体的な名詞類や動詞の語彙借用、文法借用の問題を考察する。

４．研究成果

主たる研究成果として以下の４点について簡潔に述べる。

(1) チノ語悠楽方言の文法的諸問題の解明

代表者はこれまでチノ語悠楽方言の記述的研究を進めてきた。その全体像を可能なかぎり簡明にまとめたものとして[5.主な発表論文等]の[図書]で記している『チノ語文法(悠楽方言)の記述研究』を公刊した。さらに本研究ではこれまで不明のままに終わっていた文法的な諸問題を集中的に検討して、以下の点を明らかにした。

[a] 動詞連続構造

チノ語の動詞連続構造は接続助詞などの関係明示表現を伴わず動詞語根が並列する形式をとることができる。この際、文内の名詞項の認可に関して、動詞連続構造内の動詞語根の配置が[他動詞+他動詞]となる場合、想定される主語項と目的語項が基本的に共有される。しかし、[自動詞+自動詞]の組み合わせの場合、一部の例で主語項の共有が行われないことがある。これは動詞語根を意味的な観点で捉え直せば、[意志動詞+無意志動詞]の組み合わせになっていることが多い。(5. 雑誌論文１を参照)

[b] コピュラ文の問題

チノ語悠楽方言も他の言語と同様に名詞句のみで構成される文(以下「名詞述語文」)が存在する。しかし、一方で大意を変えずに、コピュラŋɯ55 を用いた文(以下「コピュラ文」)に置き換えることも可能である。

そこでチノ語悠楽方言のコピュラ文と名詞述語文を対照すると、意味論的・語用論的な条件として、モダリティーを明示したい場合や、述語に置かれる名詞句が一時的な性格を持つことを明示したい場合はコピュラ文が生起しやすいことがわかった。加えて、述語に置かれる名詞句に情報上焦点を当てる

場合もコピュラを生起させやすい。(5. 雑誌論文 4 を参照)

[c] 間接疑問文に関する初期報告

代表者は 2007 年にチノ語悠楽方言の直接疑問文の助詞の分布について論考を公刊した。しかし、間接疑問文については詳細な状況をつかめずにいた。

本研究計画内ではチノ語悠楽方言の間接疑問文の形態統語論的構造についてその概略の記述を試みた。補足節内の構造から、間接疑問文を「間接選択疑問文」と「間接疑問詞疑問文」の 2 種に分類することができる。前者は節末の構造が[V-否定辞-V]となり、後者は疑問語が節内に生起するだけで節末に置かれる述語に特に疑問を標示する機能辞を置かない。そしていずれの疑問文も節境界の標識として他の引用節などにも用いられる=ɛ44 を置くことが典型的である。

特に今回の研究では間接選択疑問文においては節末に動詞述語しか置くことが許されず、直接疑問文に見られるような名詞述語文と動詞述語文の区別がなされないことが判明した。(5. 雑誌論文 5 を参照)

[d] 所有格後置詞 =ɛ44 の機能

チノ語悠楽方言の名詞句における所有構造は[所有者名詞=ɛ44 所有物名詞]となる。=ɛ44 は名詞句に後接する事例が典型的と考えられるが、実際の自然発話では文末や節末に生起する場合も多く見られる。そこでデータを広く再検討すると、文末に生起した場合は話者のモダリティー(疑念や推測など)を意味的に表すことがわかった。また文末・節末に生起する例を通じ、統語的には=ɛ44 に先行する要素を名詞化すると考えられることが判明した。(5. 雑誌論文 6 を参照)

この他にもチノ語悠楽方言の格標示、節連結、時制、存在動詞の問題、語順と孤立性の問題などについて学会発表を行ったが(5.雑誌論文 3, 学会発表 2, 6, 9, 11 を参照)、さらに詳細な整理・分析を施したいと考えている。近刊を待たれたい。

(2) チノ語悠楽方言の歴史的発展に関する考察

チノ語悠楽方言の歴史的発展について現段階での結論をまとめた。

音韻的にはチノ語悠楽方言において頭子音や介音については同系諸語内でも比較的に古態的であるのに対し、母音や末子音は改新的な変化が確認される。

さらに文法範疇に関わる機能辞についても比較を行った。格標識についてはロロ・ビルマ諸語内でも形式が非常に異なることから、言語の分化が起こった後に各言語で発達させたのであろうと考えられる。またチノ語悠楽方言は 5 種類の使役接辞が存在するが、これはチベット・ビルマ祖語が持っていたと考えられる動詞の自他対立を反映しておらず、チノ語独自に発展させたものと考えられる。チノ語悠楽方言の否定辞・禁止辞・真偽疑問の標識はチベット・ビルマ祖語の段階まで遡ることが可能だと思われるが、コピュラと複数標識についてはロロ・ビルマ祖語の段階にまでしか遡れないと現時点では結論づけられる。(5. 雑誌論文 2 を参照)

この他にも介音の歴史的発展などについて学会発表を行ったが(5. 学会発表 7 を参照)、再整理を行った上で論文を公刊する予定である。近刊を待たれたい。

さらに本研究ではチノ語悠楽方言のレキシコンを検索可能な形に変換する計画があったが、チノ語悠楽方言の文法の問題や調査において判明した語彙の問題などを検討すると、データの整理法に再検討が必要であるとわかった。そのため、レキシコンデータベースに遅れが生じているが、近い将来に公開できるように整理作業を継続していく。

(3) チノ語補遠方言の音韻体系の整理と基礎語彙・基礎文例の収集、歴史音韻論

チノ語補遠方言は蓋 1986 の研究以来具体的な基礎語彙の全体像も分からぬ不十分な段階にとどまっていた。

これに対して代表者は 2009 年 3 月、2010 年 8 月の 2 回の調査を本研究計画内で行い、基礎語彙と基礎文例データの収集を進めた。このデータをもとに、音韻体系の整理を行った。その結果、蓋 1986 では摩擦音に有声音と無声音の対立を認めていたが、代表者の研究では無声音のみを音素に立てれば良いことが判明した。また蓋では 8 個の声調素を認定していたが、本研究では多くても 5 個の声調を認定することで良いことがわかった。(5. 学会発表 5 と 10 を参照)

また上記の音韻体系をもとに、チノ語補遠方言の声調の歴史的発展について初歩的な分析を行った。2 音節語の声調比較に対する整理・分析がまだであるので、声調発展の全体像については不明な点も多いが、基本的にロロ・ビルマ祖語の Proto-Tone 1 がチノ語補遠方言の 31 調に、Proto-Tone 2 が 55 調に、Proto-Tone 3 が 44 調に対応していると考えられる。(5. 学会発表 12 を参照)

(4) ハニ語ゲランホ方言・ラフ語モンハイ方言の基礎データの収集

チノ語の周辺で話されるハニ語ゲランホ方言・ラフ語モンハイ方言について 2010 年 8 月に基礎語彙・補充語彙調査を行った。前者については基礎語彙約 1800 項目について、また後者については補充語彙 500 項目について聞き取りを行った。具体的な分析・整理についてはこれからの研究に委ねられるが、引き続き分析を進め、特に同一地域内の言語接触問題を中心に検討を進めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

以下はすべて研究代表者の成果であるため、代表者の氏名と下線表示は省略する。

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 2009. Verb Serialization in Youle Jino. In Makoto Minegishi, Kingkarn Thepkanjana, Wirote Aroonmanakun, Mitsuaki Endo (eds), *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium.* pp. 251-265. Tokyo (Fuchu): Global COE Program, 'Corpus-based Linguistics and Language Education', Tokyo University of Foreign Studies.
2. 2009b. The Historical Development of Youle Jino. In Yasuhiko Nagano (ed.), *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics (Senri Ethnological Studie 75).* pp. 255-280. Suita: National Museum of Ethnology.
3. 2010a. 「チノ語悠楽方言の格体系」 澤田英夫(編)『チベット＝ビルマ系言語から見た文法現象の再構築１：格の体系とその周辺』pp. 269-286. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 2010b. A Brief Description of Youle Jino Copula. 『アジア言語論叢 8』pp. 1-25. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
5. 2010c.「チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚書」『地球研言語記述論集 2』pp. 1-14. 京都: 総合地球環境学研究所.
6. 2010d. The so-called possessive marker in Youle Jino. In Dai Zhaoming and James A. Matisoff (eds.), Forty Years of Sino-Tibetan Language Studies (《汉藏语研究四十年》). pp. 153-167. Harbin: Heilongjiang University Press.

〔学会発表〕(計 12 件)

1. 2008a. Verb Serialization in Youle Jino. Circulated at

Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium, Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand/ May, 2008)

2. 2008b. Semantic Gradation in Youle Jino Subordinators. Circulated at the 14th Himalayan Languages Symposium, University of Göteborg (Göteborg, Sweden/ August, 2008)
3. 2008c. Historical Development of Youle Jino and Linguistic Substratum of Tibeto-Burman. Circulated at the International Symposium of Linguistic Substratum of Tibeto-Burman Area (Suita, Osaka, Japan/ September, 2008)
4. 2008d. Copula in Youle Jino. Circulated at the 41st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, School of Oriental and African Studies (London, United Kingdom/ September, 2008)
5. 2009a. 「補遠チノ語調査報告---チノ祖語(Proto-Jino)再建への第一歩---」(チベット＝ビルマ言語学研究会第18回会合、京都大学文学研究科ユーラシア文化研究センター、2009/7/4)
6. 2009b. 'Tense' in Youle Jino --- with special reference to realis/ irrealis and intentionality ---. Circulated at the 15th Himalayan Languages Symposium, University of Oregon (Eugene, Oregon, USA/ July 30th, 2009)
7. 2010a. Medials in Youle Jino and Proto-Tibeto-Burman. Circulated at the 17th meeting of Linguistic Circle for the Study of Eastern Eurasian Languages, Aoyama Gakuin Univeriesity (Tokyo, Japan/ July 4th, 2010).
8. 2010b. 「チノ語悠楽方言の文」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「チベット＝ビルマ系言語からみた文法現象の再構築」研究会, 2010/7/11)
9. 2010c. Existential Verbs of Youle Jino. Circulated at the 16th Himalayan Languages Symposium, School of Oriental and African Studies (London, UK/ Sept. 4th, 2010).
10. 2010d. A Phonological Sketch of Buyuan Jino --- A Preliminary Analysis ---. Circulated at the 43th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Lund University (Lund, Sweden/ October, 2010).
11. 2010e. 「チノ語悠楽方言の「孤立性」と語順」(日本中国語学会関西支部例会・中日理論言語学研究会 ミニシンポジウム/ 発表者・パネリストとして、 同志社大学大阪サテライト、2010/12/12)
12. 2011. Notes on Buyuan Jino tones and their development. Circulated at the 18th meeting of the Linguistic Circle for the Study of Eastern Eurasian Languages, Aoyama Gakuin University (Tokyo, Japan/ 20th, February, 2011)

〔図書〕(計1件)

1. 2009. 『チノ語文法(悠楽方言)の記述研究』(神戸外大研究叢書第 43 冊) 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所. [総 217 頁.]

６．研究組織

(1)研究代表者

林 範彦 (HAYASHI, Norihiko)
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40453146

以上。